横光利一文学会 会報

第42号

目次【巻頭言】山﨑義光【第二二回研究集会印象記】中村梨恵子 副田賢二 西貝怜【読書会報告】田口律男【新入会員からひと言】大沼孝明 胡桃沢梨絵 中村梨恵子【合評会報告】松本雅之【余滴 新刊紹介】黒田大河【ゆかりの地 ネットワーク】井上明芳(鶴岡)福田和幸(伊賀)松寿敬(宇佐)【参考文献目録】【会員名簿】【第二二回大会予告】

「新らしき時代感覚」の一〇〇年

山﨑 義光

二一世紀も四半世紀が経とうとしている。横光が「蠅」「日輪」で本格デビューしてから一〇〇年。ソ連誕生、第一次世界大戦の終戦から約五年後の一九二三年一月に『文藝春秋』が創刊され、横光は「時代は放蕩する(階級文学者諸卿へ)」を寄せた。「進化」する「新らしき時代」の「供物」としての文学は「新らしき時代感覚」を表現すべきものだと述べた。そして「階級文学」とは別の仕方で、放蕩する時代の小説を書き始めた。今、横光作品を、同時代に戦後に読まれたのとは違った観点で、どう読むことで活きるか。近代文学全体に向けられた問いでもある。

一〇〇年の間に「時代」は大きく変わったとも見えるし未だ続いているとも見える。世界戦争で日常生活にいたるまで地球規模の世界が連動するようになった時代。新聞・雑誌、写真や映画そしてラジオが現れマス・メディアが拡大し、世界的な社会動向にかかわるタイムラグの小さい「報道」が浸透した。一九三三年一二月号『光画』掲載の木村伊兵衛による横光の肖像写真がある。この年、名取要之助らの日本工房が組織され、写真主体の「報道写真 reportage photo」が日本に現れた。この後グラフ誌が隆盛。「情報」という言葉が身近に現れる徴候もあった。外務省や陸海軍などに情報部署が設置され四〇年に「情報局」が発足。「情報社会」という言葉が一般化するのは六〇年代以降だという。テレビが衛星放送にまで拡大。現在我々はネットを通じて写真や動画があふれた情報の中で暮らしている。「報道」の時代から「情報」の時代へ。メディアの基盤が紙から電波そしてネットに漸次拡大移行し、世界が緊密化して連動するように進化した。

一方で、時代の尖端的動向を体現したモダン都市は飽和して他者と出会う「都会」の機能は減退し、人は他者との接触を避けるシェルターに逼塞して情報空間で出会うようになった。身体感覚と時空間のアンバランスが進行し常態化した。近くのものが遠く、遠くのものが近くなった。過去か現在か、事実か虚偽かわからなくなった。「プロパガンダ」から「フェイク・ニュース」へ。事の「真実」より「信実」が問われる。虚構にリアルを感覚する、現実的な虚構の時空間を生きている。世界が拡がったというよりも即時的な同時性とともに歪んで閉塞したとも感覚される。時代の供物としての現在の文学は、情報とは別の仕方で、どのように「新らしい時代感覚」を表象しているだろうか。

横光作品の賞味期限は切れているだろう。今そのまま食べて美味しいとは言えまい。でも消費期限は続いているだろう。ただ、そのまま食べて美味くないなら調理し直さなければいけない。